＜実践報告＞

キャンパス分散型大学における日本語補講のオンライン化の現状と課題

大　和　啓　子

要　旨

現在、群馬大学グローバルイニシアチブセンターでは、全学留学生を対象としたオンラインによる日本語補講を開講している。従来は、複数キャンパスでそれぞれに各所属の留学生にむけたコースを開講してきたが、コロナ禍のオンラインでの授業実施を契機に、日本語補講のカリキュラムを再検討し、全留学生を対象としたオンライン科目として実施することとした。統合の経緯、現在実施する補講の概要を報告するとともに、全学留学生を対象とした日本語クラスの受講状況調査、および日本語補講登録者アンケートから見る授業評価、さらに日本語補講担当者研究会を通じて明らかになった課題と改善案について述べる。

【キーワード】日本語補講　オンライン授業　キャンパス分散型大学　受講者アンケート　教授者所見

１．キャンパス分散型大学における日本語補講コースの複数実施（従来の状況）

群馬大学は前橋市、桐生市、太田市に合わせて４キャンパスを有するキャンパス分散型大学である。このうち留学生が最も多く在籍しているのが、理工学府の学生の学ぶ桐生キャンパス（桐生市）であり、次いで、医学・保健学系の学生の学ぶ昭和キャンパス（前橋市）である。現在は、４キャンパスの全留学生を対象にオンラインで開講する日本語補講であるが、従来は、在籍留学生の多い２キャンパスで、個別にカリキュラムを組み、開講してきた。（俵山2013、高橋・大和2015）。桐生キャンパス、昭和キャンパスそれぞれに日本語教員がコーディネータとして配置されていた。学期開始時には、桐生・昭和２キャンパスで各コーディネータがそれぞれに登録案内、プレイスメントテスト、クラス分け等の受講手続きを実施していた。理工学府の中には、太田キャンパス（太田市）の研究室から桐生キャンパスへ移動して受講する学生もいた。そのため、桐生キャンパスの初級コースは移動の負担を軽減するために、週２日で１回90分×２コマという形での時間割を組まざるを得ず、１回の授業時間が長すぎるという声が学生からも教授者からも度々聞かれた。運営面においても、初級段階での２キャンパスでの内容の重複について、必要な支援とは言え、数十名の学生に対する支援としての費用対効果は常に課題として挙げられていた。さらに講師についても限られた人員をキャンパス間の移動時間を考慮して、時間割を組んでいく必要があった。

２．日本語補講２コースのオンライン化による統合・再編成

2020年度、COVID-19の感染流行により、日本語補講科目も、正規科目同様にオンラインでの開講を余儀なくされた。オンラインそれまでの対面授業に倣い、桐生キャンパス、昭和キャンパスそれぞれにコースを開講し実施していた。

オンラインでの日本語補講が開始されると、学修・研究上の日本語の必要性と限られた教員リソース等の配分の結果として初中級クラスまでの編成となっていた昭和キャンパスの学生から、中級・上級レベルのクラスを展開する桐生キャンパスの補講コースの受講の要望が寄せられるようになった。そこで、桐生キャンパスのプレイスメントテストを受験してもらい、一定のレベルに達していることを条件に、受講を認めることとした。希望者の要望に応じて個別に対応する形をとっており、公式なアナウンスはしていなかったものの、オンライン授業２年目となった2021年後期には中・上級レベルのすべてのクラスで昭和キャンパス所属学生の受講があった。

このような状況を受け、学生のニーズに応えるべく、2022年４月、従来、昭和・桐生２コースで運営してきた日本語補講を統合し、再編成することにした。それに伴い、コロナ禍の臨時的措置としてオンラインで実施してきた日本語補講を恒常的にオンラインへ移行することとした。

また統合にあたっての懸念のひとつに昭和キャンパスと桐生キャンパスの授業時間割のずれの問題があった。授業時間が90分、授業間の休み時間が10分という点では共通であったが、授業開始・終了時刻には20分のずれがあった。そこで、桐生キャンパスの授業時刻を10分遅らせ、昭和キャンパスの授業時刻10分早めるという日本語補講独自の時間割を設定することとした。他の授業との関連から、毎回遅刻、早退せざるを得ない者がいる場合には、その時間をクイズ等の時間に充てる、資料をLMS にあげるなど、後から受講者が不在の間の学習内容を自習できるように配慮することを授業担当者間で確認したうえで、実施をすることとした。

３．日本語補講の概要

日本語補講は、群馬大学教養教育等が開講する専門教育・研究の中で必要となる日本語能力の向上を目指した授業とは別に、日本社会の中で支障なく過ごすための留学生受入支援の一環として、グローバルイニシアチブセンターが開講する授業である。限られたリソースの中で、初学者から生活に必要となる初級のレベルに主眼を置いてカリキュラムを組んでいる。ただし、日本語能力試験（JLPT）のＮ２やＮ１を取得している場合であっても来日直後であったり、就職活動を控えていたりなど、実際の運用上の不安などから受講を希望する者もいるため、さらに上のレベルのクラスへも展開をしている。

2022年４月統合後、再編した日本語補講コースは、初級１、２、３、初中級、中級（会話・聴解・総合）、上級のレベルを設置している。それぞれの開講時間数とレベルの目安は表１、表２に示すと

おりである。初級・初中級では、基礎的な生活日本語として主に口頭運用能力の伸長に重点を置き、中級以降は、大学生活において必要となる話す・聴くの技能のほかに学術日本語としての読む・書く技能を身に付けていくことを目指している。また、初級レベルについては、従来、文法積上型の教科書を用いていたが、Can-do 達成型の教科書への切り替えを試みている。

表１：週ごとの授業コマ数

前期	計17コマ／週	後期	計17コマ／週
科目名	授業数／週	科目名	授業数／週
初級１	4	初級１	4
初級２	4	初級２	4
初級３	3	初級３	3
初中級	2	初中級	2
中級会話Ⅰ	1	中級会話Ⅱ	1
中級聴解Ⅰ	1	中級聴解Ⅱ	1
中級総合Ⅰ	1	中級総合Ⅱ	1
上級Ⅰ	1	上級Ⅱ	1

表２：各レベルの概要

初級１	日本語の音声・文字～初級前半の内容を総合的に学習する。
初級２	初級半ばの内容を総合的に学習する。
初級３	初級後半の内容を総合的に学習する。
初中級	初級修了程度のレベルで日本語の運用力の向上目指して学習する。
中級会話Ⅰ・Ⅱ	中級レベルで「話す」技能向上を目指して学習する。
中級聴解Ⅰ・Ⅱ	中級レベルで「聞く」技能向上を目指して学習する。
中級総合Ⅰ・Ⅱ	Ｎ２受験レベルで学修上必要な日本語の基礎力向上を目指し学習する。
上級Ⅰ・Ⅱ	Ｎ２以上レベルで学修上必要な日本語運用力の向上を目指して学習する。

2023年度後期時点では、約60名の学生が登録をしている状況にある。オンライン化により、桐生、昭和の学生に加え、群馬大学ウクライナ学生・研究者支援事業によって荒牧キャンパス（前橋市）に所属するウクライナの学生、研究者にも受講が可能となった。

以上、キャンパス分散型大学である群馬大学の日本語補講のオンラインによる統合前後の状況について説明した。次節からは、群馬大学の留学生の日本語に関する全体的な状況と現在実施している日本語補講がどのように評価されているか学生のアンケートから確認していきたい。

４．日本語クラスの必要性と受講状況

補講コースの実施状況を検討するにあたり、まずは本学留学生の日本語学習の必要性や開講科目の認知度について確認をしておく。

グローバルイニシアチブセンターで行った留学生の教育・生活支援の改善につなげることを目的と

した留学生生活状況調査の一部として、日本語力の自己評価および日本語科目の受講状況について調査した。2023年度５月に全学留学生222名を対象に実施し、104名からの回答を得ている。調査期間は、５/８～５/31で、メールで依頼、webフォームで回答を収集した。設問は、日本語・英語併記とした。（理工学府・研究科53名、医学・保健学系研究科30名、情報学部・社会情報学部・研究科12名　共同教育学部９名）

現在の日本語力についての自己評価を５段階で尋ねたところ、学修・研究に関わる活動（授業理解・議論・レポート作成等）がある程度できると回答する学生が半数以上となっている一方で、日常的な会話ができない・あまりできないとする学生が２割近くいた（図１）。

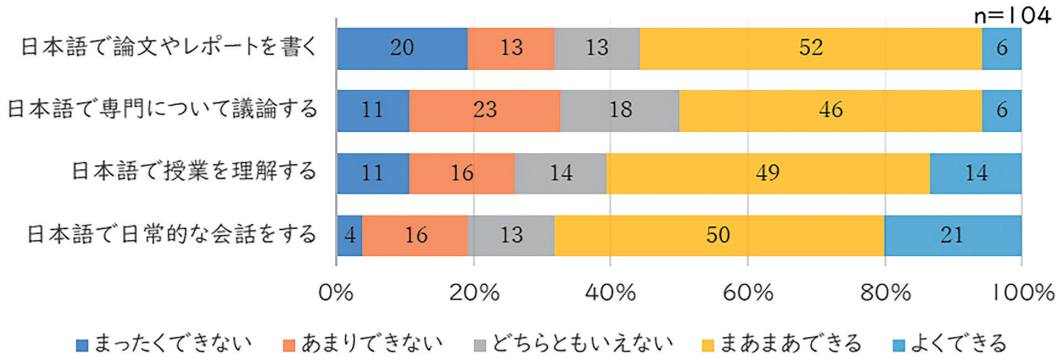
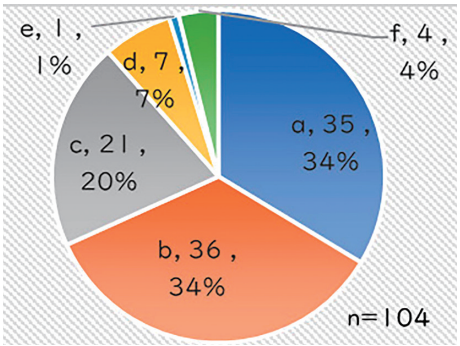


図１　日本語力の自己評価

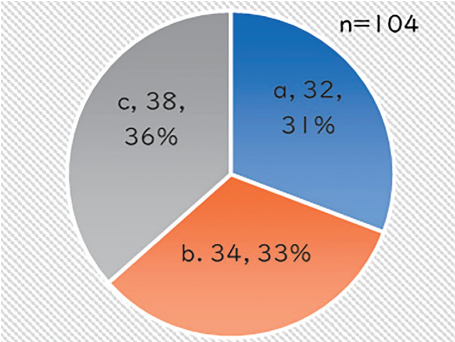
また、必要とする日本語力のレベルについては、以下図２のような回答を得ている。約７割が研究場面での日本語を必要とし、残りの３割程度が日常生活場面での日本語力を求めていると言える。



a．日本語で論文を書ける	35
b．授業や研究で相手の言うことがわかる	36
c．日常生活で困らない能力	21
d．簡単な会話ができる	7
e．全く必要ない	1
f．無回答	4

図２　求める日本語力レベル

続いて、日本語科目の受講状況についても尋ねた（図３）。104回答中正規科目として単位の付与される教養教育科目の日本語授業への参加が32、単位付与のない補講への参加が34で、全体のおよそ２/３が日本語を受講していると回答した。一方で、時間やレベルが合わないこと、日本語科目の存在を認知していないことで受講できていない学生が一定数いることが見て取れる。



a．教養教育科目に参加している／したことがある		32
b．補講に参加している／したことがある		34
c．参加したことがない		38
（理由）	時間が合わない	20
	レベルが合わない	2
	日本語クラスの存在を知らない	6
	必要がない	10

図３　日本語クラスに参加しているか

日本語クラスへの参加経験の有無と学生自身が現時点で必要だと考える日本語力の関係については、表３のようになった。

表３　受講の状況と自身に必要な日本語力

		a．日本語で論文を書ける	b．授業・研究で相手の言うことがわかる	c．日常生活で困らない	簡単な会話ができる	e．全く必要ない	f．無回答
教養教育日本語		13	13	5		1	
補講日本語		8	10	12	4		
参加なし	時間があわない	4	8	4	1		3
	レベルがあわない	1	1				
	日本語クラス非認知	4	2				
	必要がない	5	2		2		1

学修・研究に必要な中・上級の日本語力の伸長を主目的とする教養教育の日本語と、留学生のセーフティネットとしても機能するよう生活日本語のレベルから開講される補講で、その性格にあわせて、選択されていることが確認できる。

さらに、調査時点で日本語力の自己評価について、全ての項目で、まったくできない・あまりできないとした17名[1]の受講状況は以下の表４、表５の通りであった。17名中、11名は補講を受講していた。時間が合わず日本語クラスに参加したことがないと回答した者の中には、日本語クラスへの不満・要望の項目に、週末開講を望むという記述も見られた。

表４　日本語自己評価「できない」学生（17名）の受講状況

教養教育科目に参加している／したことがある		1
補講に参加している／したことがある		11
参加したことがない		5
（理由）	時間が合わない	4
	必要がない	1

表５　日本語自己評価「できない」学生（17名）の求める日本語力

日本語で論文を書ける	1
授業や研究で相手の言うことがわかる	4
日常生活で困らない能力	7
簡単な会話ができる	4
全く必要ない	1

５．受講学生による補講の評価　―Ｒ５(2023)年度後期日本語補講登録対象者アンケートより―

日本語補講は単位の付与がなく、学生の自発的な動機により受講されるものである。忙しい研究活動の合間を縫って参加してくる学生たちの要望にできるだけ沿う形で実施したいと考えている。そこで、学生からのフィードバックを得るべく、2023年11月下旬、2023年度後期日本語補講登録者62名を対象にオンラインアンケートを実施した。後期前半の８週を過ぎたところで、授業改善を目的に匿名での回答を募ったところ37名からの回答を得た。

この中には回答時は受講を取りやめていた２名の回答も含まれていた。受講を取りやめた理由は、「授業のレベルが合わない」ことと「開講時間があわない」ことであった。

回答時に受講中であった学生（35名）については、「授業のレベル」、「テキスト（教材）のレベル」、「授業の進度」、「先生の教え方」「役に立っているか」について選択してもらった（表６）。各設問には、回答のしやすさという観点から選択肢を準備しつつも、具体的な改善事項を探るため、「その他」として自由記述欄を設けた。そのため、本報告では回答結果の厳密な統計的分析を行うことはしない。なお、回答言語は英語または日本語であったが、以下の結果記述については、著者が和訳、

表６　日本語補講に対する受講学生の評価

授業レベルはどうですか。	難しい	少し難しい	ちょうどよい	少し簡単	簡　単	その他
	0	3	25	4	2	0
	0%	9%	71%	11%	6%	0%
教材レベルはどうですか。	難しい	少し難しい	ちょうどよい	少し簡単	簡　単	その他
	0	1	26	5	1	1
	0%	3%	74%	14%	3%	3%
授業進度はどうですか。	速　い	少し速い	ちょうどよい	少し遅い	遅　い	その他
	0	3	25	4	2	0
	0%	9%	71%	11%	6%	0%

先生の教え方はどうですか。	とても わかりやすい	わかりやすい	問題はない	わかりにくい	とてもわかり にくい	その他
	12	12	8	0	0	2
	34%	34%	23%	0%	0%	6%
日本語のクラスはあなたの日本語力を伸ばすのに役立っていると思いますか。	とても 役に立つ	役に立つ	どちらとも いえない	役に立たない	全く 役に立たない	その他
	16	15	2	—	—	1
	46%	43%	6%	0%	0%	3%

要約したものを示す。

授業レベル・教材レベル・授業進度については、現状でちょうどよいと回答したものが、７割を超える一方で、同一クラスのなかで、「少し難しい」と「少し簡単・簡単」、「少し速い」と「少し遅い・遅い」の回答があり、クラス内の学生の評価にばらつきがあることがわかる。教材レベルを尋ねる設問の中では、その他として、「漢字があったほうがよりよい」というコメントがあった。

先生の教え方については、中立的～肯定的な評価に回答が得られた。その他では「先生による」という記述があった。

補講が日本語力を伸ばすのに役立っているかの問いには、「とても役に立つ」、「役に立つ」が大半のなかで、どちらともいえないという回答も２名いた。またその他の欄には、「このクラスで、話す、聞く、読む力をつけているが、もっと実生活に役立つ漢字を学びたい」という記述がみられた。

最後に全体的な不満、要望を自由に記述する欄には、役に立っているという好意的な感想のほか、以下のような意見が見られた。

・１コマの授業を60分にしてほしい。
・期末試験で JLPT の試験をするなどレベルの達成を明示化してほしい
・研究に忙しく時間がないので授業では短期間に多量の語彙と文型を学びたい。練習は日常で生活の中で行えばよい。現状では限定的な表現しか使えず、日本語を話そうと思っても結局英語でのコミュニケーションに戻ってしまうので、日本語学習のモチベーションが維持しづらい。
・以前の漢字のセッションがとても役に立ったので、また開講してほしい。
・開講時間帯の都合が悪い。
・授業のたびに復習があるが、それに時間をかけていて授業の進度が遅いと感じる。

以上の結果を見てみると、概ね現状肯定的に捉えられている一方で、漢字学習の充実、JLPT レベルとの対応確認、開講時間の問題などが複数からの意見としてあった。同一クラス内での各項目についての評価のばらつきも確認された。

オンラインであることについての受講環境への不満や要望もあるかと予想していたが、それについての言及は見られなかった。

6．教授者からの指摘と改善策―補講担当者研究会の実施―

前節では、学生側からのフィードバックをみたが、本節では、補講の実施について教授者の立場からの指摘とその改善策を述べる。

日本語補講はグローバルイニシアチブセンター専任教員２名と非常勤講師５名で、ティームティーチングを取る形で運営されているが、補講カリキュラムの再編統合、オンライン化にあたり、2022年から各学期の合間となる２月と８月の年２回、補講担当者研究会を実施している。前学期の報告、次学期教材の選定、進度の確認を行い、次学期の改善に向けての意見交換を行っている。

まずはオンライン化に関する点として、学生が顔を見せずにカメラオフで受講することが問題として挙がった。コロナ禍での大学のオンライン授業の全学的な対応においては、学生のプライバシーを鑑み、強制的にカメラをオンにさせないということがガイドラインに示されていた。その影響もあり、カメラをオフにして授業を受けることに慣れている学生もいた。しかし、教授者の立場からは少人数でのやり取りを重視した語学の授業において、学生の反応が全く見えない状況での授業運営は難しいとの意見があった。また、学生のオンライン受講環境について、研究室のような他の人がいるところであったり、周囲の騒音が大きい場所であったりなど、マイクをオンにするのが難しい場所から参加している場合があることが、スムースな授業運営上の妨げになることも指摘された。これらの問題については、補講の受講登録案内の段階で、カメラとマイクの使用を条件として明記し、一部のキャンパス内ではあるが、日本語補講に使用可能な教室を準備するという改善策をとることにした。

教授者視点から、オンライン化によって得たメリットの一つに、来日が遅れる学生への対応がある。群馬大学の学籍があり、LMS が使える環境があれば、自国からでも遅れることなく授業に入ることができ、来日前の学生の受講が可能となった。従来は来日が遅れてしまったことにより、学習の進んでしまった日本語クラスに途中から参加することが難しく、次の学期まで受講できないという問題がたびたびあった。

また、ペア・グループ練習に欠かせないオンラインのブレイクアウトルームの活用については、対面教室のように複数のグループの様子を同時にみることができないというデメリットの一方で、個別にアドバイスをしやすいという点もあり、今後も有効な活用法についての議論が必要な点である。

教材についても、オンライン化に伴い、オンラインの特性や、学生の入手しやすさを考慮して選定し、進度や扱う内容については、前学期からの学習の継続性などを考えながら、受講生の状況にあわせて調整を行っている。

7．今後の課題

以上、キャンパス分散型大学である本学のオンライン日本語補講について概要およびその実施につ

いて学生と教授者の両視点からの課題等を明らかにした。

学生アンケートから見えたクラスの中での評価のばらつきに関して対応を考えている。初学者などは、学期当初は同様のレベルであっても、学期半ばくらいになると、日本語学習へのエフォートの差などからレベル差が生じることがある。そのため、16週間の授業の最後まで継続できずに途中で脱落してしまうケースがこれまでもあった。その多くの場合、再度学習したいと思っても、数か月後の新学期まで待たなければならず、日本語学習を断念してしまうことも多かった。そのため、将来的に学期を半分に分けて８週間のコース編成とし、再度の挑戦をしやすくすることも検討していきたい。これにより、学期途中からの受講を希望する学生にも対応が可能になると考えている。レベルや授業数など、限られたリソースを組み合わせてのコース編成には課題も多いが、日本語補講は本学の留学生受入支援として欠かせない存在であり、改善に取り組む必要がある。

今後も学生の日本語を学びたいという意欲を大切に、本学での留学生活がより充実するように、学生にとっても、教授者にとっても、よりよい形での日本語補講の在り方を考えていきたい。

注

1．図１のとおり、日常的な日本語能力について、全くできない（４）または、あまりできない（16）と回答したものが20名いるが、他の項目については、よくできる / まあまあできると回答したものが３名おり、すべての項目について、まったくできない・あまりできないとしたものは17名であった。

参考文献

越智貴子・大和啓子・舩橋瑞貴・野田岳人・田中麻里（2022）群馬大学外国人留学生の生活状況と課題―外国人留学生支援に関する調査から―，群馬大学国際センター論集，3，19-33

高橋裕輔・大和啓子（2015）群馬大学昭和キャンパスの日本語教育の現状と課題，群馬大学国際教育・研究センター論集，14，53-59

俵山雄司（2013）群馬大学桐生キャンパスの日本語教育の現状，群馬大学国際教育・研究センター論集，12，45-50

Current Status and Issues of Online Supplementary Japanese Language Course at Multi-Campus University

YAMATO Akiko

The Global Initiative Center (GIC) at Gunma University provides Japanese language courses for international students across the university. Previously, courses were only available at two of the four affiliated campuses for international students. However, due to the COVID-19 pandemic and the temporary implementation of online courses, the curriculum was reviewed and a decision was made to offer an online course for all international students at the university. This report provides an overview of the currently available supplementary course and offers background information on its integration. It then reports on the current status and issues of the course, based on (i) a survey of international students' Japanese language learning across the university, (ii) evaluations of students taking the supplementary Japanese language course, and (iii) interviews with the course instructors.